

拙著の由来

商兆琦

1. 学部生の時から、近代化が如何にして中国と日本の命運を分かったのかを知りたい。日中の近代化を比較して、現代中国のかかえるさまざまな問題に取り組みたい。
2. 学部三年の時、「足尾銅山鉍毒事件と田中正造」を卒業論文テーマに選んだ。**その時の考え**：足尾鉍毒事件は、日本近代公害の原点であり、明治維新の近代化政策における一つの負の結果だと考えられた。現在の中国は、急速な経済発展を遂げ、環境破壊を加速させている。その発展の代価が農民階層に転嫁されているという状況が足尾鉍毒事件に類似していると考えた。足尾鉍毒事件から現在の中国が何を学ぶことができるのかを検討したいと考えた。
3. しかし、中国で入手できる史料には制限があったため、考察の焦点を足尾鉍毒事件の事件史から田中正造の思想へと移行させた。
4. 2007年10月から、日本で一年間の特別聴講生として研究の機会を得、先行研究を把握することができるようになり、先行研究の問題点に気付いた。まず、田中正造の思想が儒学から大きな影響を受けたということは、先行研究ではほぼ無視されていたということである。次に、鉍毒事件についての検討は、「価値判断」により「神格化」された正造像に束縛されていたということである。それらの問題点を解決するため、「儒学」から正造が受けた影響を実証的に追究しようとした。
5. 2009年北京大学を卒業して、東京大学大学院に留学。2012年提出した修士論文は、これまで検討されてこなかった明治・大正における田中正造の人間像と鉍毒事件の思想像を、比較の方法を用いて実証的に明らかにすることである。明治時代の人々が抱いた田中正造のイメージ、また田中正造の自己認識と生活環境、さらに鉍毒事件をめぐる明治知識人の言説や思想のなどの側面から検討した。
6. 2016年1月に提出した博士論文『明治時代の知識人と足尾鉍毒事件 —「近代性」問題への思想史的接近』は、「思想史事件」としての鉍毒問題という問題意識の下で、田中正造、勝海舟、福沢諭吉、島田三郎、陸羯南、内村鑑三、幸徳秋水といった明治知識人を取り上げて、鉍毒事件をめぐる彼らの思想言説を解明しようとした。その目的は、従来の田中正造論と鉍毒論の相対化を促す一方、さまざまな価値観が混在し、関連し、また相互に拮抗しつつある明治思想史の一面を眺めることにある。それと同時に、明治知識人たちが鉍毒事件に直面して生じた「精神的な反応」を析出することにより、彼らが如何にして「近代」を受けとめ、またその「近代」に内在する様々な欠陥をどのように暴露して克服しようとしたのかを解明したい。
7. 博士論文を基にして2020年に刊行された拙著は、次のような部分からなっている。
 - ① **事実探求**：鉍毒問題についての明治知識人の理解や認識はそれぞれに異なっていた。
—では、どのように異なっていたのか？
 - ② **理由分析**：鉍毒問題をめぐって生まれた諸々の思想は、「同じ世界が異なる観察者からすればこれほどまで違う様子であるのは、誠に人を警醒させる事実だ」（『イデオロギーとユートピア』）というカール・マンハイムの判断を証明する。
—では、知識人たちはどうしてこれほどまで異なる認識と理解を有したのか？

- ③ **思想背景の分析**：幕末から明治に至る日本社会において彼等がそれぞれ異なる思考様式と問題意識を形成してきた。そのため、鉱毒問題という共通の課題に対しても、それぞれに異なる「精神的な反応」が生じたわけであろう。

—**客観的な思想背景**：幕末から明治は新旧文化が交代し、東西思想が融合した「るつぼ」の時代であった。このような「るつぼ」の時代を通して思考を鍛え上げられた明治知識人たちは、それぞれ異なる視座によって鉱毒問題を認識していた。

—**主観的な問題意識と価値観**：「近代化」（文明化）をめぐる認識の違い。

鉱毒問題をめぐるそれぞれの知識人の対応の仕方は、実は彼等の「近代」への認識、「文明」のあり方についての思考と結びついていた。

「文明」（「近代」）の諸像	
田中正造	農村自治、名望家支配、道徳政治
福沢諭吉	数理学と独立心による人心改造、技術と法律、理優先
勝海舟	リーダーシップ、安民、決断、情優先
島田三郎	共和政治、多元的国家論、経済の「民主化」
陸羯南	福祉主義、国家社会主義、共同体政治
内村鑑三	リキスト精神による物質文明の克服
幸徳秋水	社会主義による資本主義の克服

- ④ **通時的な思想像**：「伝統的思惟様式」から「近代的思惟様式」への転換の一側面を描きたい。「近代性」の「生起と形成」、「継承と調整」、「挫折と挑戦」という運命、そして伝統思想と導入された西洋思想とが複雑に交錯する歴史場面を描きたい。

- ⑤ **共時的な思想像**：それぞれの知識人の思惟の様式を互いに比較させることに、明治思想史における彼らの位置づけを捉えたい。